



7

世界文学全集

レ・ミゼラブル〈2〉

ユゴー／佐藤朔訳

新潮社



世界文学全集 7

レ・ミゼラブル II

ヴィクトール・ユゴー

訳者 佐藤 朔

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

第二部 コゼット（続）

第六章 ブチ・ピクピュス

1	ピクピュス小路六十二番地	9
2	マルタン・ヴェルガの修道院支部	12
3	きびしさ	19
4	陽気さ	20
5	気ばらし	24
6	小さな修道院	29
7	暗がりの人影	31
8	心のつぎに石	34
9	胸当てにつつまれた一世紀	35
10	永久礼拝の起原	37
11	プチ・ピクピュスの終わり	39
1	修道院の抽象的観念	41

第七章 余談

第八章 墓地は与えられたものを受けとる

2	修道院の歴史的事実	41
3	どんな条件なら過去を尊重できるか	44
4	原則から見た修道院	46
5	祈り	48
6	祈りの絶対的な正しさ	49
7	非難するときの注意	52
8	信仰、法則	52
1	修道院にはいる方法	55
2	困難にぶつかったフォーシュルヴ アン	63
3	イノサント尼	65
4	ジャン・ヴァルジャンはアウスチ ン・カステイリエーホーを読んだ らしいこと	76
5	酒飲みでも不死身とはかぎらない	82
6	四枚の板のあいだ	88
7	証明書をなくすな、ということば の起こりについて	90

8	口頭試問合格	98
9	隠遁生活	101

第三部 マリユス

第一章 バリの微粒子的研究

1	小さなもの	109
2	そのいくつかの特徴	110
3	愉快な奴だ	111
4	役に立つかもしれない	112
5	その境界	113
6	歴史の一端	115
7	浮浪児はインドの身分制度にあり そうだ	116
8	前の王さまのしゃれについて	118
9	古いゴール魂	120
10	「このパリを見よ、この人を見よ」	120
11	嘲笑し、君臨する	124
12	人民にひそんでいる未来	126

13	プチ・ガヴロッシュ	127
----	-----------	-----

第二章 大ブルジョワ

1	九十歳で三十二本の歯	130
2	この主人にしてこの邸宅あり	131
3	リュック・エスプリ	132
4	百歳になりたがる	133
5	バスケットとニコレット	134
6	マニョンとそのふたりのこどもの こと	135
7	規則——晩でなければ訪問を受け ない	137
8	ふたりでも一対にならない	138

第三章 祖父と孫

1	古いサロン	140
2	当時の赤い幽霊のひとり	144
3	「安らかに憩わんことを」	150
4	強盗の最後	158
5	ミサに行く革命家になれる	161

6	教会委員に出会った結果	163
7	女の尻を追いかける	169
8	みかげ石と大理石	174

第四章 ABCの友

1	歴史的になりそこなった一団	179
2	ボッシュエのブロンドー追悼演説	193
3	マリユスの驚き	197
4	キャフェ・ミュザンの奥の間	199
5	地平線はひろがる	207
6	「生活の苦しさ」	211

第五章 不幸のすぐれた点

1	一文なしのマリユス	214
2	貧しいマリユス	216
3	成長したマリユス	219
4	マブーフ氏	224
5	悲惨のよい隣人である貧乏	228
6	かわりの人	230

第六章 二つの星の出会い

1	あだ名、新しい姓のつくられ方	235
2	「光ありき」	238
3	春の影響	240
4	大病のはじまり	241
5	ブーゴン婆さんがいろいろびっくりすること	244
6	とらわれの身となる	245
7	Uという字をめぐる推測	248
8	廃兵でも幸福になれる	249
9	雲がくれ	251

第七章 バトロン・ミネット

1	坑道と坑夫	254
2	どん底	256
3	バベ、グールメール、クラクズー、モンパルナス	258
4	仲間の組織	260

第八章 腹黒い貧乏人

1	マリユスが帽子をかぶった娘を捜しているうちに、鳥打ち帽の男に出会う	263
2	ひろいもの	265
3	「四面の怪物」	267
4	悲惨の中のばら	272
5	神慮ののぞき穴	279
6	巣窟にいる野獸人	281
7	戦術と策略	285
8	あばら家に光明	288
9	ジョンドレットが泣きそうになる	291
10	国営馬車の料金、一時間二フラン	295
11	悲惨から苦痛に助力の申し出	298
12	ルブラン氏がくれた五フラン貨幣の使い方	301
13	「一対一のさし向かいで、人目はなれた場所、主に祈ることを考へなかった」	306

第十四章 警官が辯護士にげんこを二つ与えること

14	警官が辯護士にげんこを二つ与えること	309
15	ジョンドレットが買い物をする	312
16	一八三二年に流行したイギリス調の小唄がまた聞こえる	315
17	マリユスが与えた五フランの使い方	318
18	マリユスの二脚の椅子は向かい合	322
19	暗い奥が気にかかる	324
20	待ち伏せ	328
21	最初にかならず被害者をつかまえておくべきだ	353
22	第三巻で泣いていたこども (本書の第二部第三章のこと)	357

第四部

プリュメ通りの牧歌と

サン・ドニ通りの叙事詩

第一章 歴史の数ページ

1 上手な裁断

1	上手な裁断	360
---	-------	-----

第二章 エボニーヌ

2	へたな縫いつけ	366
3	ルイ・フィリップ	369
4	土台の下のひび	376
5	歴史の成因で歴史の知らない事実	384
6	アンジョルラスと副官たち	395

第三章 ブリュメ通りの家

1	ひばりの野	400
2	犯罪の種は獄中で芽ばえる	406
3	マブーフ老人をおとずれた幽霊	410
4	マリユスをおとずれた幽霊	414

1	秘密の家	419
2	国民兵ジャン・ヴァルジャン	424
3	「葉と枝と」	426
4	鉄柵の変化	430
5	ばらが武器であることを自覚する	435
6	戦いがはじまる	440
7	悲しみに、いやます悲しみを	443

8	徒刑囚の鎖	449
---	-------	-----

第四章 下からの救いは上からの救いになりうる

1	外の傷、内の回復	458
2	プリュタルク婆さんはふしぎなできごとの説明に困らない	461

第五章 結末がはじめとちがっていること

1	孤独と兵営の結びつき	469
2	コゼットの恐怖	471
3	トゥーサンの説明で恐怖が増す	474
4	石の下の方	477
5	手紙のあとのコゼット	481
6	老人はうまいときに外出するものだ	483

Les Misérables

by

Victor Hugo

レ・ミゼラブル

(Ⅱ)

第二部 コゼット(続)

第六章 プチ・ピクピュス

1 ピクピュス小路六十二番地

五十年前には、ピクピュス小路六十二番地の正門は、いたって平凡な正門だった。この門は、いつも人を誘いこむように半分ひらいていて、そこから少しも陰気でない二つのもの、つまりぶどうで覆われた扉でとりまかれた中庭と、ぶらぶら歩いている門番の顔とが、見られた。奥の扉の上には、大きな樹木が見えた。太陽の光が中庭を明るく照らし、門番の顔が一杯のぶどう酒で明るくかがやいているとき、このピクピュス小路六十二番地の前を通る人は、愉快な気持ちに

ならないではいられなかった。しかしここは、さっきちょっと見たように、陰気な場所だったのである。

入り口はほえんでいたが、家は祈り、泣いていた。門番のところを通りすぎるのは、容易なことではないく、「ひらけ、胡麻！」を知っていなければならぬから、たいていの人たちには不可能なことであったが、それでも門番を通りすぎれば、一度にひとりしか通れないくらいに、壁のあいだのせまい階段に通じている右側の小さな玄関にはいり、その階段のチョコレートいろの羽目板と、カナリやいろの壁をおそれずに、のぼって行き、最初の踊り場を過ぎて、第二の踊り場を過ぎると、二階の廊下に出るのであった。そこまで黄いろい塗り壁とチョコレートいろの羽目板は、平然と、しかも執拗(しつよう)についてきていた。階段と廊下には、二つのりっぱな窓がついていた。廊下は曲がって薄暗くなっていた。その角を曲がって数歩行くと、ド

アに出るが、そのドアがしまっていないので、いっそう神秘的な感じを与えた。それを押してなかにはいると、およそ六フィート平方の四角い小さな部屋があった。

そこは板石が敷いてあり、よく洗ってあり、きれいで、ひんやりとし、壁には青い花模様の一巻十五スーのナンキン紙が張ってあった。ほの白い、どんよりした光が、左側の大きな窓からさしこんでいた。その窓は部屋の幅と同じで、小さなガラスがいくつもはまっていた。見回しても、だれもいなかった。耳をすしても足音一つせず、人声もしない。壁はむきだしだし、家具はなにもなく、椅子一つなかった。

もっとよく見ると、ドアとむきあった壁に、約一フィート平方の四角い穴があった。黒い、ごつごつした、丈夫な鉄の棒が縦横にはまっていて、それが格子縞というよりも対角線の、長さ一インチ半ほどの網の目を形づくっていた。壁のナンキン紙の小さな青い花模様は、その鉄格子におとなしくきちんと並んでいたが、そんな陰気なとりあわせでも、花模様はおじけたり、めんくらったりしなかった。鉄格子の目から出はいることができるくらい、ごく小さな生きものがいたとしても、鉄格子はそれを許さなかったであろう。それは

物を通さず、目を、つまり精神を通す格子だった。おそらくそういうつもりでつくったのであろう。格子からうしろに、一枚のブリキ板が壁にはめこんであり、それには泡すくい穴よりも、もっと細かい穴が無数にあいていた。ブリキ板の下には、郵便箱の口そっくりの穴があいていた。呼鈴につないだ紐が、格子のまった穴の右側に、ぶらさがっていた。

この紐を動かすと、鈴が鳴って、びっくりするほどすぐそばで、声がした。

「どなたですか？」とその声はたずねる。

それは静かな、物悲しいほど静かな女の声であった。ここでまた魔法のことばを知っていなければならなかった。それを知らない、声はだまってしまう、壁のむこうは墓場の薄気味わるい闇かと思えるほど、ひっそりしてしまうのである。

そのことばを知っていると、声は答える。

「右のほうへおはいりなさい」

右手のほう、窓とむきあって、天窓のついた灰いろに塗ったガラス戸があった。掛け金をあげて、なかへはいると、まだ仕切りの格子戸がおろされず、シャンデリヤもついていない劇場の棧敷席にはいったのと同

じ印象を受ける。実際、それは一種の劇場の棧敷で、ガラス戸からほのかな光がさしており、二つの古椅子と、すりきれた一枚のマットがせまくるしくおいてあり、^{ひだり}舷の高さの正面には黒い木の板がついていた。この棧敷にも格子がついていたが、ただそれはオペラ座のような金色の木の格子ではなく、にぎりこぶしのような漆喰^{しつこ}のかたまりで壁にとりつけてある。恐ろしくこみいった奇怪な鉄格子であった。

少したって、この穴倉の薄明かりに目がなれてきて、格子のむこうをすかして見ようとしても、六インチより先は見えなかった。そこに香料いりパンのように黄いろく塗った横木で、がんじょうにした黒い板戸の仕切りがあった。長い薄板をつなぎあわせたもので、その格子の幅だけぜんぶを覆っていた。それはいつもしまっていた。

しばらくすると、その板戸のむこうから、呼びかけてくる声が聞こえた。

「ここにおります。どんなご用ですか？」

それはかわいい声、ときには神々しい^{こゝろ}声であった。姿は見えなかった。呼吸の音さえほとんど聞こえなかった。墓の仕切りを通して話しかける幽霊かと思われ

た。

ごくまれなことだが、もし望みどおりの条件にかなった人ならば、正面の板戸のせまい薄板がひらいて、幽霊があらわれる。格子のむこう、板戸のむこうに、格子にじゃまされながら、顔がぼんやりと見える。それも口とあごしか見えない。そのほかは黒いヴェールで隠れている。それから黒い垂れずきんと、黒い経かたびらにつつまれたような姿が、ぼんやりと見える。その顔が話しかけてくるのだが、こちらを見もしなければ、けっしてほえみもしなかった。

うしろからさしてくる光のかげんで、先方の姿が白く見え、こちらが黒く見えるようになっていた。光線は一つの象徴だった。

しかし目は、ひらいた窓口から、だれの目からもとざされているその場所を、熱心にのぞきこむ。深いぼんやりとしたものが、その黒服の姿をつつんでいる。目はそのぼんやりしたものを求めて、あらわれた姿のまわりのものを見きわめようとする。まもなく、なにも見えないことに気づく。見ていたものは、闇であり、空間であり、暗黒であり、墓地の空気にまじった冬の霧^{きり}であり、ぞっとするような静けさであり、なにも、

呼吸の音さえも聞きとれない沈黙であり、まぼろしさ
えも見えない暗闇なのであった。

見ていたものは、修道院の内部だった。

それは永久礼拝のベルナル派修道女の修道院とい
う、陰気で厳格な教会の内部だった。いまいるこの部
屋は、応接室だった。はじめに話しかけてくれたあの
声は、受付の女の声だった。彼女は壁のむこうに、四
角い穴のそばに、二重の面をかぶったように、鉄格子
と無数に穴のあるブリキ板にまもられて、いつもじっ
と口もきかずに、すわっていた。

格子のついたその部屋が薄暗いのは、俗世間のほう
に窓が一つしかなく、修道院の内側には、窓がなかつ
たからである。俗人の目は、その神聖な場所を見ては
いけないのだ。

しかしその暗黒のむこうには、なにかがあった。光
があった、この死のなかには、生命があった。この修
道院は、もっとも世人を遠ざけているものだが、私が
そのなかにはいりこみ、読者にもはいっていただき、
まだ物語作者たちが見たこともないし、語ったことも
ないものを、節度をまもりながら、語ってみよう。

2 マルタン・ヴェルガの修道院

支部

一八二四年のずっと前から、ピクピュス小路にあつ
たこの修道院は、マルタン・ヴェルガの修道院支部で
あるベルナル派修道女たちの団体であった。

したがって、これらベルナル派修道女たちは、ベル
ナル派修道士たちのように、クレルヴォーに属して
いるのではなく、ベネディクト派修道士たちのように、
シトーに属していた。言いかえれば、彼女たちは聖ベ
ルナルではなく、聖ベネディクトに帰依していた。

少しでも古文書を読んだことのある人なら、だれで
も知っていることだが、マルタン・ヴェルガは、一四
二五年にベルナル・ベネディクト修道会(訳注 ユゴの作話)をつくり、本部をサラマンカに、支部をアルカラにお
いた。この修道会は、ヨーロッパのあらゆるカトリッ
ク教団に、その枝葉をひろげていた。

このようにある宗派を他の宗派に結びつけるのは、
ローマ教会では、珍しいことではない。いま問題にな
っている聖ベネディクトの宗派だけをとってみても、

それに関係のあるものは、マルタン・ヴェルガの支部をのぞいても、まだ四つの修道会があった。イタリアにモンテ・カシノと、パドヴァのサンタ・ユスチーナの二つ、フランスにクリュニーとサン・モールの二つ。さらに九つの修道会があった。ヴァロンブロサ、グラモン、セレスタン、カマルデュール、シャルトル、ユミリエ、オリヴァトゥール、シルヴェストラン、シトーなどの会。なぜなら、シトーもそれ自体、他の会の本家でありながら、聖ベネディクトにたいしては、末社にすぎないからである。シトー会は、一〇九八年にラングル教区のモレーム修道院長だった聖ロベールから起こったものである。ところで、スピアコの砂漠から引退した悪魔が（年とっていたので、隠者になったのかもしれない）アポロの古い神殿から、十七歳だった聖ベネディクトに追放されたのは、五二九年のことである。

いつもはだしで、胸に柳の枝をまきつけ、けっしてすわらないというカルメル会修道女の規則について、もっとも厳格な規則は、マルタン・ヴェルガのベルナール・ベネディクト会修道女の規則である。彼女たちは垂れずきんつきの、黒い服を着ているが、聖ベネデ

ィクトの特別の規定で、胸当てはあごのところまである。広袖のサージの長衣、羊毛の大きなヴェール、胸の上で四角に切られ、あごのところまできている胸当て、目のところまでさがっている垂れ布、それが彼女たちの服装である。すべて黒づくめだが、垂れ布だけは白い。修練女は同じ服だが、白いものを着ている。誓願修道女はそのほかにロザリオを腰につけている。

マルタン・ヴェルガのベルナル・ベネディクト会修道女は、サン・サクルマンの女たちと呼ばれるベネディクト会修道女のように、永久礼拝をおこなう。後者は今世紀のはじめに、タンプルに一つ、新サント・ジュヌヴィエーヴ通りに一つ、パリに二つの教会をもっていた。だがいま話しているプチ・ピクピュスのベルナル・ベネディクト会修道女は、新サント・ジュヌヴィエーヴ通りやタンプルの修道院にはいていない。サン・サクルマンの修道女たちとは、まったく別の宗派だった。規則や服装に多くの相違点があった。前者は黒い胸当てをつけていた。後者は白いのをつけた上に、縦三インチほどの、めっきをした銀か銅かの聖像を胸につけていた。プチ・ピクピュスの修道女はその聖像をつけていなかった。永久礼拝は、プチ・ピクピ

ユスの教会とタンブルの教会に共通だったが、それでも宗派としてはまったく違っていた。サン・サクルマンの修道女たちとマルタン・ヴェルガのベネディクト会修道女との類似点は、ただ永久礼拝をおこなうという点だけだった。ちょうどフィリップ・ド・ネリによって、フロレンスに建てられたイタリアのオラトリオ会と、ピエール・ド・ベリユールによってパリに建てられたフランスのオラトリオ会とが、イエス・キリストの降誕と生涯と死と聖母に関するあらゆる神秘を研究し、崇拜するという点で似かよっているながら、なお非常にちがっていて、ときには仇敵^{きうてき}同士になることもあるのと同じであった。フィリップ・ド・ネリは聖人にすぎないのに、ベリユールは枢機卿^{すうきけい}であったから、パリのオラトリオ会は上位を主張していた。

マルタン・ヴェルガのスペイン式の厳格な規則に話をもどそう。この修道院のベルナル・ベネディクト会修道女は、一年中粗食しかとらず、四旬節や、彼女たちにとって特別な他の多くの日に断食し、少し眠ると朝の一時から三時まで起きて、祈禱^{きとう}書を読み、朝のおつとめをはたし、一年中サージの掛けぶとんで、わらの上に寝て、入浴せず、けっして火をおこさず、金曜

日ごとに苦行をし、沈黙の規則をまもり、ごく短い休憩のあいだし話をせず、十字架称揚祭の九月十四日から復活祭まで、六カ月のあいだは、粗毛の肌着を身につける。六カ月というのは規則をゆるめたもので、実際は一年となっている。粗毛の肌着では、夏の暑さにはたえられないし、熱や神経性のけいれんを起こすことがあったので、その使用を制限しなければならなかった。しかし規則をゆるめても、九月十四日にその肌着を着ると、三、四日は熱が出る。服従、貧窮、貞節、籠居^{かうきよ}、それが彼女たちの誓いであり、それは規則によってさらに重くされていた。

修道院長は、発言権をもっているので「声の母」といわれる尼僧たちによって、三年ごとに選ばれる。院長の再選は二回に限られているので、院長のもっとも長い任期は九年である。

彼女たちはけっして男の司祭の姿を見ない。司祭は二メートルの高さに張られたサージの布でいつも隠される。説教のとき、男の説教師が礼拝堂にいるときには、彼女たちはヴェールを顔の上に引きさげる。またいつも低い声で話し、目を伏せ、頭をたれて歩かなければならない。修道院にはいることのできるたったひ